

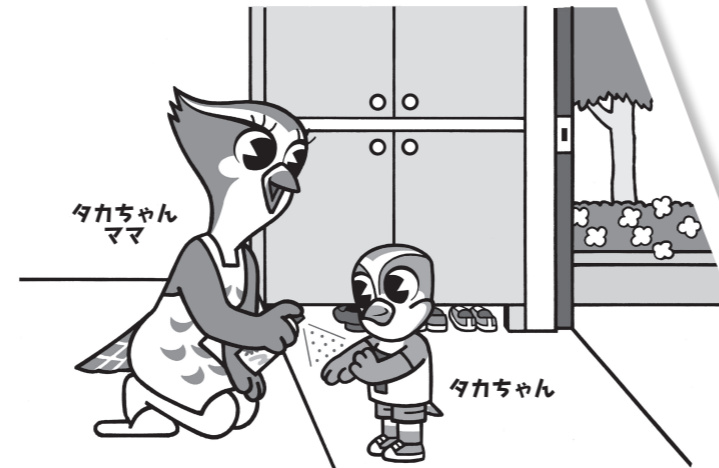


健やか豆知識

第40回

Q. 蚊に刺されたときの 対処法で間違っ ているのは?

- Ⅰ ぬり薬をぬる Ⅱ 冷やす Ⅲ 爪で強く十字をつける



感染症の運び屋「蚊」から身を守りましょう

夏になると蚊に刺される機会が多くなりますね。蚊は刺されてかゆくなるだけでなく「感染症の運び屋」とも呼ばれ、感染症を広げる可能性があるため、蚊をできるだけ発生させず、刺されないようにすることが大切です。

蚊は水たまりを産卵場所として発生するため、家の周りの空きビンや缶、ペットボトル、植木鉢の皿やバケツ、ジョウロなどに水が溜まっていないかチェックしましょう。外出時は虫よけスプレーを使用し、長袖、長ズボンなどを着用して肌の露出を避けましょう。虫よけスプレーを使用する際はまんべんなくぬり伸ばし、汗で落ちたら何度でもぬり直しをしましょう。

蚊に刺されると、大人の場合は刺された直後にプクッと小さな発疹ができ、1～2時間でかゆみがおさまること(即時型反応)が多いですが、2～6歳の幼児の場合は刺された直後は無症状ですが、1～2日後に赤いしこりができてかゆくなり、大きく腫れたり水疱ができたりすること(遅延型反応)があります。蚊に刺されたら保冷剤や冷水などで腫れている部分を冷やし、かゆみ止めの薬をぬりましょう。症状がひどい場合はステロイドホルモン入りのぬり薬がよいでしょう。ステロイドホルモンは短期間の使用であれば心配ありません。

子どもの場合は「かきむしり」に注意が必要です。刺されたところをかきむしると、そこからばい菌が入り感染し、「とびひ(伝染性膿痂疹)」という皮膚の病気になることがありますので、予防対策として絆創膏やかゆみ止めの薬が入ったパッチを貼るとよいでしょう。「とびひ」になると抗菌薬のぬり薬や飲み薬による治療が必要となります。また、野外レジャーに行った場合は刺された虫の判断が難しいため、刺された部位が大きく腫れたり、水疱ができたりなど、強い炎症がみられる場合は皮膚科を受診してください。日頃から子どもが虫に刺されないように注意し、体の腫れや赤みなどをチェックしてあげられるとよいですね。

監修 夏秋 優 兵庫医科大学 皮膚科学 教授

< Ⅲ 掘玉 >

さらに詳しい情報は
ホームページで!



高田製薬は、患者さんや医療関係者の声に耳を傾け、医療ニーズに合った医薬品の開発と情報提供で、健康な社会づくりに貢献します。

— 人びとの健康を願って —
高田製薬株式会社

⇒さらに詳しい情報は「クイズ解説」をご覧ください。